

あたらしい短歌と文章 **その1**

あたらしい短歌 —短歌の革新—

「歌よみに与ふる書」 を发表

子規は、俳句に続いて短歌の研究にも取り組みました。31才の時、新聞「日本」に、短歌についての考えを書いた「歌よみに与ふる書」を发表したのです。

このころの短歌は、1100年くらい前(平安時代)に作られた歌集「古今和歌集」を手本にして、似たようなものばかりが作られていました。そこで子規は、「古今和歌集のまねばかりしているのはくだらない。もっと日常にある題材をさがし、自分が見たこと・感じたことを自由なことばで作ろう」と、ここでも「写生」を説きました。そして、「自分は上品な言葉も、普段使う言葉も、外国の言葉も、短歌に使うつもりだ」と宣言しました。

子規の短歌を見てみよう

短歌は5・7・5・7・5・7・7の31音で作ります。
5・7・5・7・7のリズムでよんでみましょう。



9人の人がそれぞれ9つの持ち場について、これからベースボールが始まるうとしていいる。

べ 九ここの
始はじ 1 人ひと
ま ス 場ば 九ここの
ら ボ を つ
ん ー し の
と ル め の
す の て

2尺(約60センチ)ほどのびて赤く色づいたバラの芽の、まだやわらかいとげの上に、春の雨がしずかにふっている。

針はり く
春はる や 二に 尺しやく
雨あめ は 薔ばら 尺しやく
の ら 薔ばら 伸のび
ふ か の び の
る に 芽め た の
の る

短歌の仲間が集まる

古今和歌集を批判した子規は、それまでの歌人たちから非難されました。しかし、まわりの声に一步も引かず、自分の考えを发表し続けました。

やがて、子規の考えに賛成する人が少しずつ増えていきました。子規は自分の家(子規庵)に彼らを集め、歌会(短歌を作る会)を開きました。ここで作られた短歌は、子規が新聞「日本」に发表していきました。

千エック! 歌仲間の顔



子規が、短歌仲間の顔の形を描いた絵です。まるい顔やひし形の顔など、よく特徴をとらえています。

子規の短歌



病牀 ^{ビョウシヤウ}
即事 ^{ソクジ}
ガラス戸 ^{ガラス}
の影 ^{カゲ}
の月夜 ^{ツキヨ}
ヲ見エズ ^{ミエズ}
ド規 ^キ

◀これは、ふとんに寝ている子規が部屋から見える風景を短歌にしたものです。

ガラス戸のはなし

このころ、ガラス戸は高価で、まだめずらしいものでした。日本の家では、木の戸や障子を使うのがふつうでした。

明治32年(1899年)の冬、高浜虚子たちは、病気で寝たきりの子規のために、庭に面した障子戸をガラス戸にかえました。すると、昼は明るい光が入り、夜は外の寒い空気をさえぎることができるので、1日中あたたかい部屋で過ごせます。また、ガラス戸越しに外の景色をながめることができました。子規はとても喜んで、友達にも手紙で自慢しています。

この短歌を作ったときは、ガラス戸越しに夜空の月をながめようとしたけれど、ガラスに部屋のランプの明かりがうつってしまい、外が見えなかったのでしょうか。

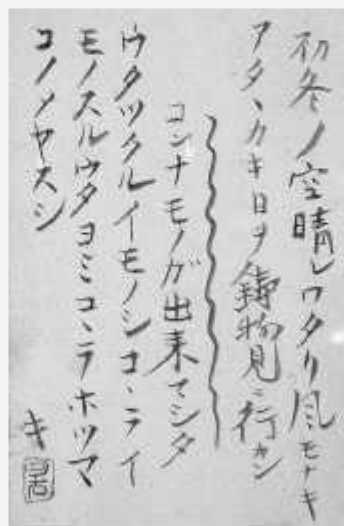
様子や気持ちをすなおに歌にしているので、子規がどんな風景を見ていたのかがよく想像できるね。



香取秀真へのはがき歌

子規は、短歌のかたちで手紙やはがきを送りました。右の写真は、香取秀真という人にあてたはがきです。寝ていることが多かった子規ですが、この日は体調が良く、秀真の家へ出かけることにしました。秀真は鉄や銅など金属の器(鋳物)を作る仕事をしていました。

手紙をもらうとうれしい気持ちになりますが、短歌で書いてあると、もっと楽しい気分になりそうですね。



初冬ノ空晴レワタリ風モナキ
アタタカキ日ヲ鋳物見ニ行カン

▲明治32年11月16日